福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI REPOSITORY

多様な視点からアフリカの貧困問題の原因と背景を探り合う-地理的事象間の関連をとらえる力を高める「世界の諸地域」学習の実践(第1学年)-

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2014-03-12
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 塚田, 勝利
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/8137

Ⅰ－1　「学びをつなぐ《探究するコミュニティ》としての実践」

多様な視点からアフリカの貧困問題の原因と背景を探り合う

－地理的事象間の関連をとらえる力を高める「世界の諸地域」学習の実践（第１学年）－

アフリカ（特にサハラより南）は，なぜ物質的に貧しい人が多いのか。主題図や統計資料を関連づけながら，貧困の実態とその背景を協働で追究していく中で，アフリカの多様性と共通性及びそれらを明らかにする視点・方法を大まかにつかんでいく。中学校社会科地理的分野の入門期の学習として，課題意識を醸成し意欲を高めていくことをめざした。

１　学びの構想

子どもたちのアフリカへのまなざし

子どもたちのアフリカに対するイメージは，３つ程度のカテゴリーに分類される。１つ目は「貧困」「飢餓」「紛争」といったネガティブなもの，２つ目は「砂漠」「暑い」「動物」「サバンナ」といった自然環境，３つ目は「黒人」「部族」といった人々の特徴である。このようにアフリカに対するイメージが多様性を欠いており，個人名がほとんど出てこない点からも，アフリカと日本の「遠さ」がうかがえる。また，小学校教科書（「社会科６年下　東書2011」）の記述を見てもアフリカに関するものは少なく，「アフリカで農業を指導する青年海外協力隊の人」などの事例は，「援助する・教える側の日本」に対して，「援助される・教えられる側のアフリカ」という関係としてとらえられがちであろう。これから子どもたちがアフリカを学ぶにあたって，いったい何に焦点をあてるべきだろうか。

多様性に富むアフリカにおける「アフリカらしさ」とは何か

サッカーワールドカップの開催や豊かな資源を背景にした高い経済成長で注目を集めているアフリカ。躍動感のある音楽やダンスなど素晴らしいものにあふれる一方，アフリカは現在も世界で最も貧しい地域である。貧困問題に焦点をあてることは，アフリカに対する偏見を助長しかねないうえに，アフリカの良さやポジティブなイメージを損なうことになりかねない。しかし，子どもたちはアフリカの貧困に目を向けることで，同じ世界に生きる者として他人事と片付けられなくなるだろう。アフリカの貧困の原因を追究していく過程で，子どもたちはヨーロッパによる分割と植民地化の経験に共通点を見いだすであろう。生活圏と無関係に国境が定められ食料・原料の調達先として利用されたことが，今日の紛争や不安定なモノカルチャー経済を生んでいる。また，生産過程における技術水準の低さとその背後にある教育の遅れ，人口の急増，厳しい自然環境なども問題の解決の障害となっている。他方，アフリカの国々の間に所得水準の格差があること，サハラ砂漠より北の地域は，歴史的，民族的に中東や地中海世界とより深く結びついていること，気候，風土，言語，文化も多様で，広大なアフリカをひとくくりにするのは難しいことにも気づかせていきたい。この実践を７班の孝弘の学びの姿をもとに，これから検証していくことにする。（＊以下に出てくる子どもの名前はすべて仮名である）

２　学びのストーリー

⑴　アフリカを多面的に見ながら課題解決に向かう（第１，２時）

アフリカのウェビングマップを家庭学習の課題として子どもたちは描いてきた。ウェビングマップとは，各自の意見で関連性のあるものを結びつけた図のことで，これを描くことでアフリカをどのように子どもたちがとらえているのか知ることができる。前単元のアメリカのウェビングマップに比べると，子どもたちの情報や知識は少ないため広がりが小さく，子ども同士の差が大きいことがクラス全体の傾向としてわかった。そこで，子どもたちの知識や情

報を共有するために，マップの中に出てきたものを付箋に記入して班の中で発表しあいながらＫＪ法的手法を用いて，分類してカテゴリーに分けることにした。

5/29 アフリカ州のイメージを班で出し合ったら

1班	2班	3班	4班	5班
苦しい生活	人種差別問題	とにかく貧しい	生き物の種類が豊富	めぐまれた自然
自然が多い	自然が残されている	独裁政権	大きい	自然によって生まれた
古代は栄えていた	ワールドカップの開催	戦争・内戦・争い	資源が豊富	問題を多く抱えている
人種差別がむごい	治安が悪い	能力のなさ	気候の種類が少ない	1年中暑い
苦しい生活	資本が少ない	発展していない	サッカーW杯で有名	
さばく気候が多い	エジプト文明が栄えた	栄養がない	古代エジプト文明	
難民	キリスト教が信仰されている	観光地として有名	暑いところで育つ食べ物	
コーヒー・カカオ・バナナが有名		宗教に熱心		
6班	**7班**	**8班**	**9班**	**10班**
自然の影響を大きく受けている	南アフリカ共和国は有名	暑い	自然がたくさん	さばくが多い
昔からの文化が残っている	主な農産物は豆類	野生動物が多い	暑い	国境が直線
発展していない	宗教・文明が発達	自然が残っている	貧しいくらし	生産は食べ物や資源が中心
	人権問題が多い	資源が豊富	動物がたくさん	チョコレート
	自然が豊か	デメリット	砂漠がある	多民族
		経済状況が良くなりつつある	農業の発達	野生動物が多い
		日本との関わり	工業の発達	国は2つしか知らなかった

このように，ほとんどの子どもたちが「貧しい」「内戦」「人種差別」といったネガティブなもの，２つ目は「砂漠」「暑い」「野生動物」といった自然環境，そして最近話題の「ワールドカップ」について書いていた。少数とはいえ，資源が豊富であることや経済状況がよくなりつつある最近の動きなどをイメージする子どももいた。

孝弘：暑い。南アフリカは暑くないけどね。
夢子：エジプトはアフリカ大陸にあるけど，アフリカじゃないって聞いたことがある。
孝弘：（資料集で調べて）やっぱりアフリカ州に入るよ。
夢子：えっ，そうなんだ。

孝弘は，南アフリカが温帯気候であることを知っていて，熱帯や乾燥帯ばかりではなく気候面での多様性に言及している。また，夢子の発言はエジプトを含む北アフリカ地域が宗教や民族，政治的・経済的つながりの点で，アフリカよりも西アジアとの共通性が多いことを背景にしている。こうしてアフリカのイメージや知識を確認したり修正したりしていった。

班の中でマップを交流したが，イメージだけでは本当にアフリカを理解したことにはならない。そこで，地図帳や教科書巻末の統計資料を用いて，アフリカの基本情報を確認していくことになった。「アフリカで知っている国名を地図に記入していこう」に対して，クラス全体の平均は54カ国中４，５カ国程度と少なかった。また，「人口や面積が日本より多い（大きい）国の数」についても，それぞれ平均すると５カ国，16カ国程度と答えていた。（実際には，それぞれ１カ国と26カ国）

生徒：そんなに大きい国があったっけ。
生徒：僕，アフリカのこと全然わかっていない。

この作業をしたことで，時間はかかるが，アフリカの遠さを強く感じ，「本当のアフリカの姿」を探る学習が始まった。

	水男	孝弘	夢子	藤子
地図上に記入できた国の数	1	13	3	1
人口が日本より多い国の数	27	0	2	8
面積が日本より大きい国の数	34	20	25	24

次の時間に，各班で出されたイメージのカテゴリをもとに，子どもたちからはあまり出てこなかった「日本とのつながり」（日本の駅伝で走るケニアの留学生，オクラ，タコ，南アフリカの自動車工場，レアメタル等）や「アフリカの近年の経済成長」（都心の高層ビル街，携帯電話を使いこなすマサイ族の人等）も含めて資料（写真）をパワーポイントで提示していく。その際に，３班の考えたカテゴリの「とにかく貧しい」に対して子どもたちが関心を示したために，「アフリカは貧しいか？」と問いかけてみた。そのときの７班のやりとりは以下のようであった。

水男：平均寿命の低さを他の地域と比べても，アフリカは貧しいと思う。
夢子：でも，ナイロビとか発展しているよ。
孝弘：貧富の差が激しいんじゃない。

そういった話し合いの後，７班は「どちらかというと貧しい」だろうと予想した。全体としては貧しくても，豊かさや発展を感じる地域があるため，「貧しい」とは言い切れないようであった。他の班も同様に「（どちらかというと）貧しい」という予想をした。

そこで「本当に貧しいのか？何をもって貧しさを測るのか」を問いかけてみたところ，次のような観点がクラスで出され，教科書や資料集の統計資料をもとに確認作業が始まった。その際の７班のやりとりは以下の通りである。

子どもの死亡率　平均寿命　食料自給率　1日または1ヶ月の収入失業者の割合　ユニセフなどから支援を受けている　食事の状況　物価　難民の割合　病気　衛生設備の利用　企業数　1家族あたりの子どもの数　教育を受けて知識があるか　水が手に入るか

夢子：１日１ドル未満で生活しているって，生活できるの？１ドルって何円だったっけ？
孝弘：100円，うーん80円？
藤子：何も買えない。
孝弘：物価が安いのかな？
夢子：でも80円って，（収入が）少なすぎない？しかもサブサハラの２人に１人が！

他の班も同様に，「いろいろなデータから総合して考えると，世界の中でアフリカはやっぱり（どちらかというと）貧しい地域」と考えた。

⑵ 学習課題を班で解決していく　（第３～５時）

前時の授業が終わってから「貧しいって，どういうことかはっきりしない」と質問してきた子どもがいたため，最初に貧しい（貧困）を「人間生活を営むのに絶対必要な要素が不足していること」と確認し，具体的にどういうことか訪ねてみた。「食料不足」「収入が少ない」「学校に通わずに働かなければならない」「病気」など，次々と具体的な姿が出てきた。また，資料集に掲載されている「カカオ豆農場に売られる子どもたち」の資料を全員で読み，「信じられない。本当？」という子どものつぶやきに，「何百年も前の話ではなくて，最近のこと」と答えた。

この後，前時に多くの子どもたちが注目していたため，７班のやりとりを紹介して「サハラより南のアフリカは，近年，高い経済成長を続けているのに，２人に１人が１日１ドル未満で生活しているのはなぜか？」という学習課題をもとにアフリカの特色を探る探究活動が始まった。

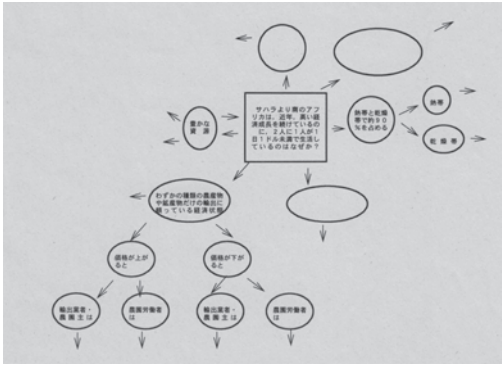
まず，子どもたちは各自で教科書や資料集，「日本とアフリカ」（外務省パンフレット）などの資料を用いて，課題の予想をたて付箋に記していった。次の時間に自分が調べ予想してきたことを班で出し合い，マップ上でつなげていった。前単元の北アメリカで作成したマップを参考に，「どの知識とどの知識が関係がありそうかな」と考えて矢印でつないでいく。

［前単元のアメリカのつながりマップ］

マップがある程度広がったら，疑問を赤ペンで画用紙に記入していく。その疑問はクラス全体の学習問題につながる下位の問いである。すぐに思いついた予想をつなげていく中で矛盾を見つけ，自分たちでつくった「わくわくする」ものであってほしいと考えた。下表は，そのときの班別の疑問一覧である。

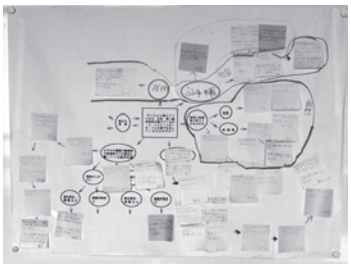
1班	なぜ輸出しているのに、労働者の取り分が少ないのか
2班	熱帯では良い条件がそろっているのに、食料不足になるのはなぜか
3班	アメリカもアフリカも資源があるのに、生活に差があるのはなぜか
4班	昔は栄えていたのに、なぜ今は栄えていないのか
5班	豊かな資源があるのに工業が発達しないのはなぜか
6班	死亡率が高いのに人口が急増しているのはなぜか
7班	全就業人口の64%が農業に従事しているのに、農業生産量が少ないのはなぜか
8班	高い経済成長を続けているのに飢餓人口が多いのか
9班	豊富な資源があるのに工業化が進まないのはなぜか
10班	感染症でたくさんの人が死亡しているのに、人口が増えているのはなぜか

［アフリカのつながりマップ（下図は７班作成）］



付箋をマップに位置づけていくときに事実をもとに付箋内容の説明をしたり，「本当に？」「それ以外に理由はないのか？」と問い直したりするように子どもたちに求めた。それにも関わらず，付箋をそのまま読み上げるだけだったり，他の説明に問い直すことをしなかったりする生徒もいた。子どもたちの事象に対する事実認識や関係認識のあいまいさだけが理由ではなく，このマップづくりの活動がどんな学びにつながるのかということがはっきりとしていなかったためだと思われる。

そこで，班でつくった疑問が学習問題につながるものであるか検討する時間をとってみたところ，７班はそのままだったが，下のように一部変更する班も見られた。



2班	熱帯では食物をつくる好条件がそろっているのに、輸出がふるわないのはなぜか
4班	なぜアフリカの技術が発達しないのか
6班	死亡率が高いが出生率の方が高いのはなぜか
8班	なぜ食料が不足しているのか

［班でつくった疑問を検討している場面］

こうやって学習問題を解決するためという前提を確認した後,それぞれの疑問をもとに班別調査を行った。

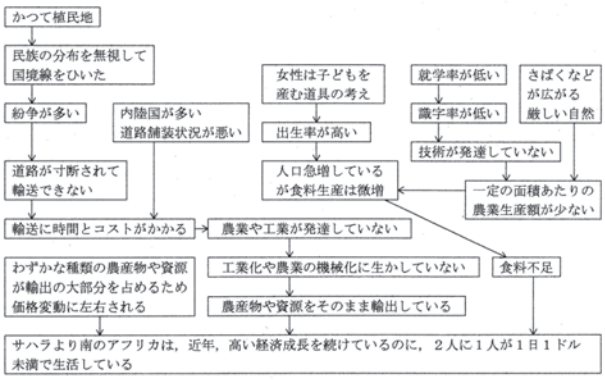
⑶　アフリカの貧困の原因を探り合う(第６～８時)

ア　思考回路図から班としての考えを構築する

この後，班別調査内容の発表を行い，他の班の気づきや考えを自分たちの考え（思考回路図）に生かそうということになった。下の表は，各班の発表内容の要旨である。

1班	一次産品の価格は相手国の言い分や国際価格で決められてしまい、安値になりがち
2班	紛争が多く発生し、道路等輸送が寸断されてしまい港まで運べない
3班	植民地時代から、資源をそのまま輸出してしまい、加工して製品化していない
4班	国境による民族の分断や資源の独占により紛争が起こり、就学率が低く識字率が低い
5班	工業に必要な技術が不足しているため、資源をそのまま輸出しているから
6班	医学の発達によって子どもの死亡率が低下したが、出生数はそれほど減っていない
7班	めぐまれた気候の割合が少なく、技術も不足しているため、土地生産性が低い
8班	人口（食べる人）は増えているのに、それほど食料生産は増えていない
9班	識字率や就学率、つまり教育水準が低いため、資源を工業に生かせていない
10班	女性は子どもを産む道具という考えから、人口は増えているのに食料は増えていない

子どもたちは，他の班の発表を聞きながら，気づいたことを付箋に書き留め，付箋を出し合いながら班ごとに思考回路図を作成した。



［思考回路図（７班）］

７班の作成した思考回路図を孝弘がクラスで説明した。その説明された内容を「①厳しい自然条件」「②技術不足」「③かつて植民地」「④その他」に授業者が分類し，一番の原因は何かと皆に問いかけてみた。尚，④その他は，何か他の理由があればということで設けたところ，「④その他として人口増加でもいいですか」という前子の提案を皆にも紹介した。すると，半分ほどの子どもは②，数名ずつが①と③，前子１人が④であった。その後の７班での話し合いは，以下の通りである。

孝弘：僕は自然条件。自然を克服するのも限界がある。例えばさばくとか無理でしょう。
夢子：私は技術。ビニルハウスとかかんがいとかで農業ができるようになりそう。
藤子：（孝弘君が言うように）自然条件は変えれないけど，（夢子さんのように）上手に生かしていくことはできそう。
水男：技術が発達していない。それは植民地だったので，民族が分断され，紛争が多いから。

子どもたちは一番の原因を探し求めていくことで，貧困のそもそもの背景としてのアフリカの共通性に気づき始めている。

イ　これまでの学習を振り返り自説をレポートにまとめる

夢子：
一番の原因は技術不足だと思う。なぜなら，１つ目は作物の品種改良ができないということ。アフリカの厳しい自然条件に適する作物はあまりないけど，品種改良で作物の種類が増えればモノカルチャー経済にならず安定した経済になると思うから。２つ目は，技術がないためにせっかくの資源が生かせないということ。資源から製品をつくれば人手もいる，仕事がない人がそこで働き給料をもらえば生活が改善されると思う。

孝弘：
厳しい自然条件では，なぜ農業が発達しないのか。それは農地として利用できる面積が小さくなるため，アメリカのように機械や肥料を用いて企業的で効率的な農業を行おうとしないから農業面での技術が発達しない。だから食料不足になっているし，工業面での技術不足につながっている。工業は多くの労働力を必要とし，その上利益も多く得られる。だからたくさんの人が一定の収入を得られるのに，アフリカでは工業が十分に発達していない。

前子：
人口が増加しているのに，あまり食料生産が増えていないため食料不足になっている。すると働かない子どもたちは，食料がもらえなくなり，生きるために食料を求め，学校に行かなくなる。教育を受けないため知識がなく技術が発達しないから，農業や工業が発達しない。また，たくさんの資源や農産物を加工せずにそのまま輸出することになり，安い価格になったり，モノカルチャー経済のため価格変動の影響を大きく受けてしまう。モノカルチャー経済になってしまった理由に，かつて植民地でヨーロッパの人が好む物ばかり作って輸出していたからというのがある。

貧困の１番の原因として掲げているものは３人とも異なるが，厳しい自然と豊かな資源，植民地化の影響，モノカルチャー経済，農業や工業の未発達等を技術不足を軸に関連させて説明していることは共通している。

⑷　自己のアフリカ像の変化をたどりながら，アフリカのこれからを考える。　（第９時）

ワークシートやノート，使用した資料などの本単元に関わる学習物を時系列に机の上に並べて，今までの学習を振り返ることとした。

理子：
［最初のイメージ］
貧富の差が激しい　民族衣装を着ている
アフリカ語を話す
［調査活動（「本当に貧しいのか」）後］
平均寿命，子どもの死亡率，栄養不足などの指標を見て

「桁違い」の多さにショックを受けた。
［調査活動（「貧しさの理由」）］
　フランス語などを話したり，特定の農産物や資源が輸出の大きな割合を占めたり，民族間の争いが多いなど，かつて植民地だったころの影響が続いている地域だとわかった。また，技術が十分に発達していないから（加工しないで一次産品を）そのまま輸出してしまうことが貧しさの一番の理由だと考えた。
［これからのアフリカ］
　日本など周りの国の技術面の協力により，資源を生かして経済成長して生活が豊かになっていくと思う。

孝弘：
［最初のイメージ］
自然が豊か　古代文明が栄えていた
［ＫＪ法で分類してネーミング］
植民地下の影響で，不安定なモノカルチャー経済
［調査活動（「貧しさの理由」）］
　貧しさの一番の理由は内戦や紛争が多いこと，次に技術不足と厳しい自然。さらに，貧しいから教育を受けることができずに知識や技術が身につかず農業や工業が発達しないという貧困の悪循環に陥っている。
［これからのアフリカ］
　技術が発達して資源をうまく活用している南アフリカ共和国は工業が発達している。ということは他のアフリカ諸国も，先進国の支援による教育の充実や技術支援により，工業を発達させて貧しい人が減っていく。それにより今度は良い循環が生まれていくと思う。アフリカはまだまだ成長の可能性があり，近い将来とても重要な地域になるだろう。

一面的なイメージが広がり，アフリカの今とこれからを自然，産業，歴史などの視点から説明していることが読み取れる。

3　省察

⑴　省察を捉え直し，次なる学びに生かす
－子どもたちは何を学んだのか－

内容面での学び～核となる学びの面から～

本校社会科では，「多様な視点で社会を見つめ合い，自己を問い直す」という核となる学びを設定し，探究を中心とする学習活動を実践している。では，本単元の学習において多様な視点から地域的特色をとらえ社会認識を深めることができたのだろうか。

アフリカのイメージや知識を出し合う中で視点が広がり，ＫＪ法的手法を用いて，分類してカテゴリーに分けることで視点が整理された。また，複数の視点でとらえていたアフリカを「貧困」という１つの視点でとらえ直すことで，諸事象のつながりに注目することもできた。砂漠が広がる厳しい自然と食料不足，教育水準の低さや技術不足と農業・工業の未発達，かつて植民地だったことと内戦の多さやモノカルチャー経済については多くの子どもたちが因果関係に気づくことができた。７班が作成した思考回路図を見ると，自然，歴史，社会など多様な視点から諸事象をつなげて地域的特色をとらえることができるようになったことが分かる。

しかし，アフリカ州(またはサブサハラアフリカ)全体として貧困の原因を多様な視点から考えていくことは，地域紛争のない地域にも地域紛争が原因で貧困が発生しているという間違った理解を生む危険性があるといえよう。この後の他州での「世界の諸地域」学習においては，地域内の格差や立場による違いにも目を向ける学習展開が求められる。

探究面での学び

ア　コミュニティのためのＫＪ法的手法や思考回路図，ランキングの活用と班構成は協働探究として有効だったか

自分たちのイメージや知識を出し合って，ＫＪ法的手法を用いてグルーピングしネーミングをつけるという方法に子どもたちは意欲的に取り組んだ。グループのタイトルをつける場面では，「自然」や「歴史」といった項目名をつけがちであったが，修飾語をつけたり文で表現したりするようにうながすことで，「自然が残されている」（２班）や「自然の影響を大きく受けている」（６班）など工夫した表現が見られた。また，分類するという作業がアフリカの共通性を見つけるだけにとどまらず，アフリカ州内の地域による多様性に着目することにもつながった。日常の生活班での活動であったが，コミュニケーションをしながら既有知識や視点を交流していけたと考えている。

一方，思考回路図の作成の際には地域の特定事象を離れて一般化できることで推論の幅が広がると同時に，図示化されているため個の考えを出しやすくなり議論が活発になることを期待したが，歴史や政治・経済についての学習がほとんど行われていない中学入門期の子どもには推論を広げていくことは難しかったように思われる。そのため，班によっては社会科の得意な子どもが話し合いを進め，他の班員はそれを聞いているだけでほとんど発言できていなかった。発言をしていない子どもたちを発言しやすくするにはどうするか，キーワードを精選すること以外にも，話し合いの途中に考えさせたり，後に振り返りの機会を設けたりしてコミュニケーションについて学ぶ機会を設けることも必要だと思う。

それに対して，「①厳しい自然条件」「②技術不足」「③かつて植民地」「④その他（人口増加）」の中から一番の原因は何かを選ぶランキングは，子どもたちにとって考えやすかったようである。また，前掲の７班は自然と考えが違う構成員の班構成になっていたが，そういった事前のモニタリングと意図的な班構成が求められる。

イ　単元の構造は個の学びを高めるために有効だったか

世界の諸地域学習のスタートとして，子どもたちにとって最も身近に感じる北アメリカを取り上げた。子どもたちのイメージから出てきた「強い」をとりあげて「本当に強いのか」そして「なぜ強いのか」を探る学習展開とした。広大な国土と多様な気候を生かした生産性の高い農業，豊かな資源と水運，高い技術力を生かした工業，自由競争のもとでの高い生産意欲などに子どもたちは気づいていった。この単元では，国を対象として農業や工業の発達の原因を明らかにする展開としたわけである。

それに続く本単元は，子どもたちにとって最も遠く感じるアフリカの「貧しさ」をとりあげて「本当に貧しいのか」そして「なぜ貧しいのか」を探るというアプローチとした。北アメリカと同じような学習展開としたため，子どもたちにとって取り組みやすくなるだろうと考えた。しかし，アメリカ合衆国を中心に原因を探っていった前単元とは異なり，54か国もあり国や地域によって多様であるアフリカを全体としてとらえることについて，アフリカの「遠さ」も加わり，内容面で「難しい」と感じている子どももいた。そこで，子どもたちの予想や考えを具体化したり検証したりできるような資料を用意し必要に応じて提供するようにした。その際に本単元に関わる「知識の構造図」を事前に作成しておいたため，適切な段階で資料や情報を提供し，子どもが新たな内容・視点を持つように支援することができたと考えている。

⑵　しっくりとしない授業者の手ごたえ
課題の妥当性について

本単元では「１日１ドル未満の生活」をとりあげて人々の生活レベルを課題とした。しかし，国や立場による生活の違いに気づくような具体的な資料を用意していなかったため，貧困の罠（悪循環）から地域や立場を超えて一般化して類推していくしかなかった。授業者としては，国レベルの経済や産業の未発達の原因を中心として取り上げ，自然，歴史，外国との関係など多様な視点から探究できれば良いと考えていた。もちろん両者は密接不可分で関連し合っているが，中学校社会科入門期の学習ということを考えると，どちらかに絞った方が広がりすぎずに考えやすかったと思われる。

３年間の子どもの学びを省察する
－単元の構造に関する問題点について－

中学１年社会科地理的分野の「世界の諸地域」学習をどう進めていけば良いのか。単元配列としては，生徒にとって身近な北アメリカ州を最初に取り上げて，産業の面から，恵まれた自然条件と生産性の高さ，自由競争に着目させる学習展開とした。それに続く本単元のアフリカ州においては，前単元の学びを生かしながらも，人々の生活と産業の両面から探っていく学習展開とした。しかし，前述したように「難しい」と感じる生徒もいたことを考えると，産業面１つに絞って追究した方が子どもたちにとって考えやすかったと思われる。次の単元は，アフリカのこれからを考える際に注目させた，熱帯気候で植民地だった東南アジアが1980’ｓ頃からモノカルチャー経済を克服し経済発展できたことの背景と要因について考える展開とする。この東南アジアを含むアジア州の学習においては，他地域との結びつきや国の政策との関連も取り上げて経済成長の理由を探る展開を構想している。また，アフリカ連合の結成という新しい動きから，国家を超えた地域連合のモデルとしたヨーロッパ州にもつなげていく。

このように産業を軸に「世界の諸地域」を学習する単元構造としながら，北アメリカ州では自然と産業，アフリカではそれに歴史を加え，さらにアジアでは他地域との関連や国の政策を含めるというように，少しずつ多くの地理的事象の関連をとらえるように計画的に配列している。また，ヨーロッパ州においては，地域内の差異，つまり地域内の格差や立場による違いにも目を向ける学習展開としていく。さらに２年生の「日本の諸地域」へのつながりを意識し，自然，歴史的背景，産業，環境，人口，生活・文化，他地域との結びつきの７つの視点をバランス良く学習し，６州の学習を積み重ねる中で，地理的な見方・考え方が高まっていくようにしていきたい。それらの学びは，３年生の「よりよい地球社会をめざして」の学習に生かされていく。こうやって子どもたちの問いが連続し，多様な特色をもつ世界の諸地域の人々が豊かに生活していくためにはどうすればよいのかを考えていくわけである。

（塚田　勝利）

参　考　文　献

舩田クラーセンさやか編　『アフリカ学入門』　明石書店　2010.

福井大学教育地域科学部附属中学校研究紀要40号別冊　社会科編　2012.

福井大学教育地域科学部附属中学校研究会　『学びを拓く《探究するコミュニティ》』第４巻　2009.